

第二次世界大戦体験記

細井晶子

上鷲宮五丁目

第二次世界大戦の時、私は中野区上高田にあった昭和高等女学校の三年生だった。

男子若者はどんどん戦地に送られ、「銃後の守り」をする私達女学生も、お国の為に全校あげて勤労奉仕をする事になった。

身体の弱い生徒は、学校で兵隊さんの階級章の星を付ける仕事につき、私達元氣組は、三鷹にあった中島飛行機製作所で学徒として働くことになった。

カーキ色の木綿とスフ混紡のごわごわしたつなぎの服が渡され、腕に「学徒」の腕章、頭に日の丸と「神風」と書かれた鉢巻をしめて、何が何でもお国のために頑張らなくてはならないと思った。

私達の職場は、迷路のような地下を通り、四階か五階か忘れたが大きな建物の中に何十台と並ぶ、旋盤、ミリング、ボール盤などの機械が廻る轟音と、油の匂いのする井口班に配属された。

徴用で来ている年配の工員が段取りをしてくれる旋盤の前に

立った。はじめて見る大きな機械に私は身体がふるえた。赤い印のついた目盛りまで右を動かし、左を廻しと、立ち通して油だらけになるつらい仕事であった。ペンしか持った事のない十四歳の女の子に何ができよう。

後で知った事だが「隼」はやぶさとか、「吞龍」どんりゆうとかの飛行機の部品を作っていた。

二四時間体制の作業所は三部交代で、七時～十五時が昼勤、十五時～二三時が半夜勤、二三時～翌朝七時迄が深夜勤で、一週間交代である。深夜勤の辛さは格別で、遠く東の空が白みかかる午前五時頃、一気に睡魔におそわれる。機械の音が遠くになり、立っていてスーツと身体が前にのめる。髪を長く三つ編みにしていた同級生が、機械のベルトに髪を巻かれて大怪我をしたり、指を切ったりの事故が続く。疎開で級友が一人減り二人減り、三分の一の人数になってしまった。

私は田舎に知り合いもなく、疎開も出来ないまま東京で頑張るしかなかった。

半夜勤の時は家に帰れないので、中島の寮に泊る事になる。寮の食事は、コーリヤン米の赤い御飯と、大根と大根の葉の煮物、毎食それだけのひどいものだった。大根がトラックに山積みされて搬入されるのを見て、又大根かと、皆でがっかりため息をついたものだ。その後遺症か最近になるまで私は大根を見るのもいやだった。

そのうち空襲が激しくなり、中島飛行機製作所は攻撃の的になった。

とある深夜勤明けで休日の次の日の事である。昼勤で出勤した私達は、異様な光景を目にした。大きな穴が屋上から地下までいくつもあいた建物、メチャメチャに破れた窓ガラス、カーテンに包まれて隅の方に置いてあるもの……。後で死体であるとは知らされ絶句した。私の旋盤はどこかにフツ飛んで影も形もなかった。それでも隙間風の吹く中で、動く機械と取り組まなければならなかった。

それからは空襲警報がなるたびに、建物から遠くへ離れろと言われ、走って、走って、走って逃げた。もう動けないとしゃがみ込んだ私を、誰かが近くの防空壕へ引きずり込んでくれた事もある。誰も彼も必死だったのである。頭上を飛ぶB29のぶい爆音を、未だに忘れる事は出来ない。

落合いの家は戦災にあい、中村橋の叔母の家に逃げて行ったが、そこでも連夜の空襲で、焼夷弾の直撃をうけて焼ける家の

音、人々の泣き叫ぶ声、B29の爆音、ザアーツと焼夷弾が頭上に雨の如く落ちてくる音。一メートルの至近距離に落ちた時には、もう駄目だと生きた気持ちがいなかった。さいわいにもそれは不発弾であった。石の門柱が倒れた。二度と味わいたくない恐ろしい体験である。

勝利を信じ、お国のために特攻隊となって体当たりをして逝った若者達、学校にも行けず震えおのきながら、大きな機械と取り組んだ女学生達……。今、何が報われていよう。

何事も秘密で写真を撮る事も禁じられ、日記は戦災で焼けてしまい、私のうろ覚えの事だけを書いてみたが、戦後の食糧難時代も経験し、あたら青春を戦争の犠牲になってしまった私達の年代……。

声を大きくして叫びたい。「もう戦争はいやです！」 「戦争は絶対にしてはいけません！」と。